

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20720204

研究課題名（和文）

平安・鎌倉期における地方造瓦組織の復原

研究課題名（英文）

Restoration of the system of roof-tile manufacture in the Heian and Kamakura period

研究代表者

梶原 義実 (KAJIWARA Yoshimitsu)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80335182

研究成果の概要（和文）：

本研究では、平安後期から鎌倉前期における地方造瓦組織、とくに平安京をはじめ遠隔地へと瓦供給をおこなっていた諸窯についての検討をおこなった。その結果、尾張地域においては12世紀前半の鳥羽離宮供給段階、中葉の平安京内供給段階と、後半の鎌倉等への供給段階では、それぞれ生産・流通の掌握の様相が異なる可能性を、考古学的検討および胎土分析の結果により指摘した。また同時期の播磨や讃岐などの瓦陶兼業窯の様相との比較をおこなった。

研究成果の概要（英文）：

This study examined the system of roof-tile manufacture, focusing on various kilns that supplied roof-tiles to Heian-kyo and other distant places. As a result, based on archaeological consideration and chemical analysis of roof-tile ware, I suggest that, in the Owari region, characteristics of controlling production and distribution systems differ in respect to phases. In the early 12th century, they provided roof-tile to Toba-rikyu, in the middle 12th century to Heian-kyo and in the late 12th century to Kamakura and to other regions. Additionally, it was compared to that of the kilns used in firing both roof-tiles and pottery in Harima and Sanuki over the same period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学、瓦、造瓦組織、手工業生産

1. 研究開始当初の背景

従来の瓦研究は、類似する文様・技法の瓦を横に結びつけ、その分布や移動経路をたどる手法が中心であった。従って、導き出される結論としては、同一瓦当文の分布範囲は同一氏族の勢力圏であるとか、中央系の瓦当文の地方波及が律令政府の地方支配を反映しているとか、中央系の文様や技法を多く取り入れている地域は中央とのパイプが強い先進地であるというようなことに自ずとってくる。そこには、瓦の動きが当時の政治的動向を反映・代表しているという大前提が至極当然のように存在する。

しかし、発掘調査事例の増加により、瓦の動きと、例えば寺院の伽藍配置など他の諸要素の動きとがきれいに一致しない例が数多く見られるようになった。そればかりか、瓦のみに絞っても、軒丸瓦と軒平瓦・平丸瓦・鬼瓦や鴟尾などの道具瓦が、必ずしもセットで移動しているわけではないことが判明しつつある。軒平瓦は中央系だが、軒丸瓦は在地系といった例が結構みられるのである。そういった中で、都合の良い特定種の瓦だけを取り上げて、上記のテーゼを上書きしていこうとする現在の研究動向には当然ながら無理がある。異なる目的意識下での研究法の提案が急務であるといえよう。

そのような研究現状の中で申請者は、律令制下における生産組織の復原を目的に、科学研究費「律令期における地方造瓦組織の復原」(平成14～16年度、課題番号14710270)を取得し、おもに奈良時代を中心とした地方造瓦組織のあり方について検討をおこない、そこから律令政府の地方生産組織の統括方法について推察を加え、また手工業生産研究総体の中での今後の瓦研究のあり方について提言をおこなった。

具体的には、以下のような論考を執筆している。

梶原 2003「造瓦組織の復原と瓦当文—東海地方の国分寺から—」では、東海地域という限られた地域においても、国分寺造営期の瓦当文様の系譜が軒丸瓦と軒平瓦で異なる例や、また瓦当文様と瓦製作技法の動きが一致したり異なったりと、さまざまな様相が見受けられることから、特定の「中央系」文様だけを追うのではなく、造瓦組織総体を比較検討し、それに意味を付していく研究手法が、現在の瓦研究の中では急務であると説いた。

梶原 2005「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開—6225・6663系を中心として—」では、中国地方東部を例にとり、平城宮第2次大極殿の主要瓦である6225・6663型式の系譜を引く瓦について、その文様構成の型式学的変化などから、まず最初に在地の有力寺院に採用され、そこから国分寺へという移動経路を証明し、これらの瓦が従来言われていたような、国分寺造営に対する中央政府の援助の証とはならないと論じた。

それらの成果を踏まえつつ、梶原 2005「国分寺瓦屋と瓦陶兼業窯」では、国分寺創建期の造瓦組織が、平安期以降まで継続する例と、系譜が断絶する例があることに注目し、その差異が、陶器生産との兼業の有無と大きく関連していることを証明し、瓦生産は恒常的需要がすくなく需給バランスが安定しないという、生産物としての特質から、古代の地方においては、それ単独で生産組織を維持することは稀であったと論じた。

この論考は、飛鳥・白鳳期に比べ、また奈良時代に比べても、従来論じられることがはるかに少なかった、平安期における地方の瓦について積極的に取り上げたという意味でも重要である。

しかし、平安期の瓦については筆者もいまだ研究途上であり、とくに平安後期から鎌倉初頭の瓦陶兼業窯については、主要消費地である京都での様相はともかく、生産地でのあり方はあきらかになっていないとは言い難い。また、平安中期の地方の瓦生産については、さらにわからないことが多く、総合的な研究は皆無と言ってよい。本研究費においては、そのような点から、引き続き平安期の地方の瓦を中心に検討をおこないたい。

2. 研究の目的

本研究費においては、平安期から鎌倉期にかけての地方造瓦組織の様相をあきらかにすることが目的であるが、とくに平安時代後期から鎌倉時代初頭における、尾張・播磨・讃岐などにみられる瓦陶兼業窯について、その生産・分業のあり方と、瓦生産の契機やその管掌者について考えていきたい。

この研究の意義としては、先述の論文「国分寺瓦屋と瓦陶兼業窯」の中でもすこし触れているが、平安期の地方造瓦組織について復原することで、平安期における律令制の変質過程と、その時期における地方側の様相を、生産組織という面から復原することができる。それは他の生産組織のあり方と比較検討することで、生産組織全体の復原が可能となり、ひいては、文献史学の成果をも含めた、平安期および、中世への移行期前後における社会経済史的研究にも、十分に資することができると思う。

3. 研究の方法

まず研究の学術的な特色について述べる。分析検討の手法としては、対象となる瓦について、その文様および製作技法から、他の瓦との系譜関係を復原するという、方法論的にはオーソドックスなものになるが、従来は中央の瓦との類似性のみが優先して検討され

ていたのに対し、筆者は同時代の他地域の瓦や、当該の瓦に先行する同地域の瓦なども含め、その系譜関係を幅広く検討していくことを念頭においている。また、先に軒丸瓦と軒平瓦で系譜が異なる例が存在すると述べたが、当該瓦の系譜が必ずしも単一のものではない可能性も考慮に入れつつ検討することで、従来の研究者とは異なった視点での造瓦組織の復原ができると考えている。

4. 研究成果

平成20年度については、平安時代後期における、平安京へ運京されたと考えられている瓦の生産地について、尾張地域（猿投窯東山地区・知多）・播磨地域（神出・魚住）・讃岐地域（十瓶山）の資料調査をおこない、資料の図化・データ化をおこなうとともに、調査担当者などとの意見の交換をおこなった。

これらの窯生産地個々に関して、現在までに提示されている論考や報告は、播磨を除いて非常に少なく、むしろそれらを総合した議論は、1978年の上原真人氏の論考「古代末期における瓦生産体制の変革」（『古代研究』13・14）が提示されて以来、ここ30年ほどほとんど進行していなかったというのが現状であり、現地での情報交換も含めた資料収集は、研究を進行させる上でたいへん意義のあることであった。

また、東海地方に関しては、生産体制についての論考を著し、発表をおこなった（2008年度日本考古学協会愛知大会）。消費地での状況や、詳細な年代観などを含め、まだ研究途上ではあるものの、猿投・知多での瓦の年代観は、併焼する山茶碗の年代観とも深く関わるものであり、年代や管掌者を含めた当該地の窯業生産全般を考えるにあたって、有効な問

題提起がおこなえたと思われる。

消費地の調査についても、鎌倉で出土する尾張産瓦とその系譜の瓦の調査に着手した。

平成21年度については、平安時代後期における大規模な瓦生産地のうち、とくに尾張地域の八事窯について、その供給先のひとつとされる相模地域（鎌倉永福寺・三浦満願寺・伊勢原市石田遺跡群など）の資料調査をおこなった。その結果、これらの胎土・焼成が尾張八事窯の瓦に非常に近似しており、尾張産の可能性がきわめて高いことを確認するとともに、鎌倉における永福寺系瓦の編年作業やその他相模地域の尾張産瓦の位置付けについて検討をおこなった。

また、吉備地域や東海一円、さらに和泉地域の古代～中世にかけての寺院跡や古瓦の調査をおこなった。そのうち、とくに和泉地域においては、梶原2010「古代寺院と行基集団－和泉地域における奈良時代寺院の動向と「行基四十九院」－」（『名古屋大学文学部研究論集』167）において、和泉地域における奈良時代の寺院の修造と行基四十九院の間に関連性が薄いことを述べるとともに、逆に平安後期に和泉地域において、瓦をもちいて造営修造がおこなわれた寺院の多くが、行基関連寺院であることから、この時期に行基の顕彰の一環として、大規模な造寺活動がおこなわれた可能性を示唆したが、これは当該期である中世前半の造瓦組織のあり方にも大きくかわる内容である。

さらに、梶原2010『国分寺瓦の研究－考古学からみた律令期生産組織の地方的展開－』（名古屋大学出版会）においても、尾張や讃岐を例に、平安後期の造

瓦体制の変革について触れた。

22年度は、おもに尾張産瓦の分析をおこなった。尾張産の平安末～鎌倉前期の瓦は、その前半期は京都に、後半期には鎌倉や相模地域へと遠隔地供給されていることが、過去の諸研究で論じられている。21年度には永福寺など鎌倉周辺出土資料および、相模地域での出土事例との比較検討を、実際の遺物観察の成果よりおこなっており、22年度においても引き続き検討をした。その結果、永福寺や千葉寺遺跡出土の軒瓦においても、尾張東山窯（八事裏山窯）産瓦との同範の認定が難しく（知多半島の阿久比板山窯からも、東山窯と同文の瓦が出土している）、またその他の遺跡では丸平瓦のみの出土しかない例もみられる中で、肉眼観察のみから東山窯産であると比定している現況では、今後、当該期の造瓦組織や瓦の需給関係を復原していく研究の土台とはなりにくいとの結論に至った。

そのうえで、これらの瓦に対して、胎土分析をおこなうことで、科学的に立証することが、研究の前提として必要であると考えた。そのため22年度予算の一部を使用し、生産地側の尾張東山古窯跡群出土瓦の胎土分析をおこなった。その結果、東山窯産の瓦の胎土は大きく2つにわかれており、京都に供給されたと考えられる前半期の瓦と、鎌倉・相模に供給されたと考えられる後半期の瓦では、成分組成に若干の差異がみうけられた。

23年度は、平安期から鎌倉期にかけての地方造瓦組織のあり方を復原するための資料として、研究史上において尾張産とされてきた、消費地である京都・鳥羽東殿出土の瓦群および、鎌倉をはじめとした相模地域で出土する瓦群の胎土分析をおこない、それを22年度におこなった生産地側の分析データと照合することで、瓦の需給関係を理化学的データにより検証した。

その結果、両者ともそれぞれ、生産地である尾張地域の東山窯跡群の瓦と近似したデータが得られ、尾張産の瓦が京都（鳥羽東殿）や鎌倉に運ばれていたという先行研究の指摘を裏付ける成果が得られた。しかしながら、相模地域出土の尾張産とされる瓦の胎土分析データが、遺跡がそれぞれ相模国内に離れて点在するにもかかわらず、まとまった値を示すのに対し、鳥羽東殿出土の瓦のデータは、一遺跡のデータながらもかなりばらつきがみられる結果となった。この解釈として、ひとつには生産体制側での胎土選択や混和剤使用などでのばらつきの大小とも考えられるが、京都への供給が、鳥羽東殿造営の間ある程度継続的にもしくは複数の工人単位による大きな生産規模でおこなわれていたのに対し、相模地域へはごく限定的に生産され供給された可能性も考えられよう。これは、12世紀前半の京都への供給と、12世紀後半の相模地域への供給が、異なる供給原理のもとでおこなわれたと考える筆者論（梶原2008「東海地方における瓦生産」）にも整合的である。さらに言うなら、尾張における瓦陶兼業窯での短期集中・非連続型の瓦生産は、おなじく京都への遠隔地供給をおこなっていた播磨や讃岐が、ある程度生産の継続性をもち、播磨においては瓦専業窯も指向していくという様相とは、大きく異なっているといえよう。平安後期の京都への瓦の遠隔地供給は、国司の成功などの一形態として語られることが多いが、その現地でのあり方は、各国の窯業の現状にあわせつつ多様であったといえよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ①梶原義実「伊勢地域における古代寺院の選地」『名古屋大学文学部研究論集』173号（頁：133-149），査読有，2012年
- ②梶原義実「尾張地域における古代寺院の動向」『尾張・三河の古墳と古代社会』同成社，査読無，2012年
- ③梶原義実「エルサルバドル共和国におけるスペイン瓦の生産について」『名古屋大学文学部研究論集』170号（頁：47-64），査読有，2011年
- ④梶原義実「国分寺の諸段階—造瓦組織からの考察—」『日本史研究』583号（頁：1-19），査読有，2011年
- ⑤梶原義実「国分寺創建期の諸相—東海道および信濃国分寺を題材に—」『平城京と東海道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館特別展図録（頁：1-12），査読無，2010年
- ⑥梶原義実「選地からみた古代寺院の造営事情」『遠古登攀—遠山昭登君追悼考古学論集』（頁：183-201），査読無，2010年
- ⑦梶原義実「古代寺院と行基集団—和泉地域における奈良時代寺院の動向と「行基四十九院」—」『名古屋大学文学部研究論集』167号（頁：69-86），査読有，2010年
- ⑧梶原義実「国分寺研究における諸問題」『名古屋大学文学部研究論集』164号，査読有，2009年
- ⑨梶原義実「東海地方における瓦生産」『日本考古学協会2008年度大会発表資料集』（頁：603-624），査読無，2008年，

〔学会発表〕（計9件）

- ①梶原義実「豊前地域における古代寺院の諸相―選地・周辺環境と瓦当文より―」平成23年度九州史学会大会，2011年12月10日，九州大学
- ②梶原義実「国分寺の諸段階―造瓦組織からの考察―」2010年度日本史研究会総会，2010年10月9日，京都大学
- ③梶原義実「尾張・三河の古代寺院」愛知県陶磁資料館企画展「1000年前のハローワーク」愛知県史講演会，2010年7月10日，愛知県陶磁資料館
- ④梶原義実「播磨の古代寺院」発掘された明石の歴史展『法道仙人と行基菩薩の時代』，2008年12月14日，明石市立文化博物館
- ⑤梶原義実「東海地方における瓦生産」日本考古学協会2008年度大会，2008年11月9日，南山大学

〔図書〕（計2件）

- ①梶原義実『国分寺瓦の研究―考古学からみた律令期生産組織の地方的展開―』（総頁339頁），名古屋大学出版会，2010年
- ②八賀晋・天野暢保・城ヶ谷和広・梶原義実ほか『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～白鳳』（総頁848頁），愛知県史編さん委員会，2010年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶原 義実 (KAJIWARA Yoshimitsu)
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号：80335182

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし